

日本人と唐詩

漢詩は、唐の玄宗皇帝の時代（七一二年～七五六年）に絶頂期を迎える。李白と杜甫は「李杜」と称され、この時期を代表する詩人である。

二人は、七四四年に運命的な出会いを果たす。李白のほうが杜甫よりも十一歳年長であるが、二人は意気投合し、しばらくの間行動をとみにする。さぞかし二人は酒を酌み交わし、当時の時世や詩について熱く語り合ったことであろう。杜甫が李白を慕う気持ちは強く、別れて後も数多くの詩を李白に贈っている。李白が豪放な性格で、誇大表現を用いて、自由奔放な詩を詠んだのに対し、杜甫は沈鬱な性格で、厳選した語句を緻密に配置することによって詩を詠んだ。こうした詩風の違いが生じたのは、二人が出会う

10

5

ことによってお互いの特性・違いを認め合ったことにあるのかもしれない。

李白と杜甫が活躍している時期、日本は遣唐使を派遣し、中国の最先端の文化を吸収することに懸命であった。中でも阿倍仲麻呂は、日本人でありながら中国の官僚試験に合格し、政界で大いに活躍した。詩も巧みで王維や李白と交遊している。日本に帰ることを試みたが、船が遭難し、結局帰ることはできなかった。

天の原ふりさけみれば

春日なる三笠の山に出でし月かも

これは、仲麻呂が中国で故郷を思つて詠んだ歌であるが、月を見て望郷の思いを催すのは、李白の「静夜思」に通じるところがあるかもしれない。

15

10

5